



起さないで

川内康範

東京文藝社



眠いの起さないで

二九〇円



昭和三十六年十二月二十日印刷
昭和三十六年十二月二十五日発行

著作者 川内 康範

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社

東京都新宿区牛込弘方町一
振替口座 東京二一七五七

眠いの起きないで ■ 目次

第一章／誰かが私を呼んでいる	7
第二章／浮気は神の悪戯である	11
第三章／恋から道徳が生まれました	18
第四章／豚に真珠はやれない	23
第五章／旗本はうかつに眠れない	28
第六章／泣いちやったです	34
第七章／歴史はおへソから始まる	40
第八章／本日は仏滅なり	47

第九章／女の敵は女である	53
第十章／人間よ原始にかえれ	59
第十一章／子は反逆するものなり	64
第十二章／敵艦あらわる	72
第十三章／軟派第一号作戦出動す	77
第十四章／ヘタナ同情はマイナスを呼ぶ	81
第十五章／他人の目玉は信用できない	87
第十六章／デモは感染するものなり	92
第十七章／本日スト決行せり	99
第十八章／弱き者汝の名は親なり	104
第十九章／恋もお金も待てば来る	109
第二十章／愛されたときから邪魔が入る	115
第二十一章／女が泣くのは恋のためである	120
第二十二章／純情だけでお腹はふくれない	125

第二十三章／淑女は無頼漢に弱い	129
第二十四章／素直は必ずしも親切ではない	134
第二十五章／子供を相手にケンカはできない	139
第二十六章／花嫁修行はクサイものである	144
第二十七章／来るなら来てみる母トンボ	149
第二十八章／転んでも悔はありません	154
第二十九章／絶望から光りが生まれる	159
第三十章／神を祈って仏をつくらない	164
第三十一章／芝居にはどんでんが必要です	168
第三十二章／眠いのを起すのは男である	173
地獄が俺を呼びにくる	179

眠いの起さないで

第一章 誰かが私を呼んでいる

アッチ（私）の名前を、すぐに読める男性はいない。読めても、きつと間違つて読むにきまつている。学がないのが多すぎるんで困っちゃうんだな。

五百旗頭いおきべゆかり——というのがアッチの正しい呼び方なのに、たいていの男の子は、ごひゃくはたがしらさんだとか、ごひゃつきがしらだとか、ぜんぜんアンチロマンな呼びかたしきやできやしな。い。アッチはそういう男ケイベツするな。

当用漢字にないっていったつてさ、そんなこといたら小説なんて読めやしないよ。そのくせ、その読めもしない小説をさ、わかったふりして読んでる奴が多いんだからね、ざわざわしちゃうんだ。

おつといけねえ。

お母上さまがお睨みでござる。

「ゆかりさん、すこしはお上品になすつたらいかが」

こうきちやうんだからね。もつと上品にしなきゃわが五百旗頭家のお品格にかかわるというわけさ。そもそも、わが家の御先祖さまは、史上名高き狸爺、徳川家康公の守護役に、世にいうところの旗本頭。いざクーデターやテロなどが起きた折に、まっさきかけて將軍さまをお守りする役目であつた。なんのことはない、狸爺の用心棒だつたわけ。

それでも、旗本五百旗を預るボスであつたことが、この上もない名譽だとわが家の歴代は有難く考へてきたのだからなっちゃアないんだ。ホントに。

「アッチは、うちの名前、珍らしいから好きだけど、先祖が用心棒だなんていやだな」

「もつたいたいことを云つてはいかん。由緒ある守護職を用心棒とは何事でありますか」

これは当年七十八歳の祖父、五百旗頭弥五郎のお叱り。

「でもさ、右翼だとか左翼の殺し屋から、將軍さまを守るため、自分の命を投げ出したんでしょ」

「だから尊いのですぞ」

これは、嚴父弥一郎のおコトバ。

「アナクロだな。それじゃまるで兵隊と同じじゃないの。今どきはやらないわ」

「まア、お父さまに向つて、おコトバをおつつしみあそばせ」

これ、わかる？ アッチを産んだおつかちゃん。

「おふくろはな、日本語を知っちゃいねえのさ」

これは兄貴の英夫。K大学の英文学部三年生。ナニワ節の大ファンで右翼的ケイコウがある。そしてアッチは、文化学院の一年生。身長一六〇、バスト八五、おヒップ九一、おっぱいちよつと發育不全だけどスタイルにはちよつと自信があるんだ。顔だつて個性的だし、誰かが、若い時のマーナ・ロイに似てるつてさ。ヘッヘヘ、申訳ない。

生れてちようど十七年八ヵ月。本当は高校だけで喫茶店につとめながら、體驗的小説書くつもりだつたのに、親の虚榮のギセイになつて親孝行の第一課。しかたなく行つてゐるのさ。

アッチ、不良かな？

どうしてもコトバがぞんざいになつちゃう。ま、いいや、しゃべることぐらい自由にさせて欲しいな。

さて、わが家の紹介もおわつたし、何しようかな。時間は午後九時二十分。

お父さまは会社からまだかえらない。お母さまはお爺ちやまとテレビ観てるし、英夫兄貴はまだ新宿の寄席らしい。寝るのはまだはいいし、といつて勉強するのはいやだし、アッチ、何考えてるの

かな？

ドドンパでも踊りに行こうか。

財布の中は二千五百六十円也。これだけあれば、ちょっと飲めるな。ジンカクテルとピンククレディ。ヘッヘヘ、二杯飲んだら酔っぱらっちゃってさ、

「おーい、アッチの処女、欲しいやつに上げるよー」

大きな声で交番の前でドナったそうだけど、あれ本当かな？

つまらないな。なんだかとても寂しいな。きゅーつと抱いてくれる人はいないかな。

ふぐ料理屋のドンちゃんにはきびが不潔だから、いや。

代議士の息子のタケシは嘘つきだし、自動車工場の安公はモルモットみたいになちよこまかしてるし……写真屋のせがれの明夫はチクノウ症だし……ああ、どれもこれもムードなし。

大人にしようかな。大人は狡いけど恋愛するんならやつぱり大人だな。結婚するんじやなし、レンアイするんだから、ぜったいに大人がいいな。その大人によつて、アッチがどう変って行くか……そうだやつぱり書くのが一番いいな。「アンネの日記」だとか、「悲しみよコンニチハ」みたいに、うまくいくとアッチはマスコミに乗っかって、ちょっとした女流文学者ってことになるかもしれない。

マスコミがアッチを呼んでいる——そんな予感がするではないか。

ふむ、やっぱりあれだな、失恋しなくちゃダメだな。愛してはならない人を愛して、そして傷ついた少女の魂の告白。ヘッヘ、いかすじゃないか。なに、つまらないって？——わかるかっちゃったわネ、どうせ人間なんて、つまらないことをつみ重ねながら生きて、そしてきつと死ぬ。

第二章 浮気は神の悪戯である

×月×日

天気予報、雨のち晴れだつて。バカじゃないかしら、雨のあとは晴れるにきまつてるのに、どうして大人たちっておかしなことを真面目な顔してやってるのかしら？

新聞に書いてある。いまや現代の青少年を支配しているものはクレイジームードである。

これもおかしい。支配しているもののものって何んだい？ 狂っているのはどっちだかわかりやしない。

朝からチチとハハがハナシしていた。

「あなた、あの女秘書をクビになさい」

「理由は」

「美しすぎます」

女をやめつつあるハハのコンプレックス。

「ありやア整形美人ですよ」

チチ、けろりとしてこたえ、けろりとして出て行った。日本美術印刷株式会社の社長である。将来の用心棒だったわが家の昔をしのばせる面影はない。ハハと結婚する前、アメリカに留学をして、インデアンの娘と恋愛をした自由主義者なのだ。

アッチは、チチの方が好きだ。ハハは、理窟屋で、インテリぶって、そして虚栄心がつよくて、ムスメのアッチに、女としての敵ガイ心を燃しはじめている。

「ゆかりさん、あんまりお洒落をしすぎますよ」

てなことをチクリチクリとおっしゃる。そうかと思うと、Gパンツスタイルをすごくケイベツして、

「自転車やの小僧さんみたいな服装はおやめなさい。品格にかかります」

「ハイな」

「まア、ちゃんとおこたえなさい」

「ハイです」

「あきれた」

あきれたがハハのくせ。アッチを文化学院に入れたのもこのハハである。いずれ、値段の高いところへ売り飛ばすつもりにちがいない。

「ゆかりさん、学校は？」

「お母さまは？」

「今日はお休みです」

ハハは、四十五歳。あさましくも美容体操の学校へ通っている。アッチ、一度覗いたことがあるけど、まさに、醜惡ムザン。肥ったのや枯れたのがワイワイ集って腰の屈折運動から、こじわのマッサージ。どうわめいてもかえる筈のない青春をよみがえらせようと必死の形相でバックなどをして
いる。

アッチ、がっかり、ぞくぞく。女のあさましさを見せつけられて、チチが美人秘書を置く気持に共鳴しちゃった。

十一時頃から学校に行くと云って銀座の喫茶店『クロンボ』でお節と逢う。

支那料理屋の娘。半年前、コックの陳さんに中国語を習っているあいだに、中国へかえれない陳さんに同情して処女をやってしまった。

「とうとうやっちゃった。さっぱりしたわ」

お節はアッチにそういった。あんたもはやくおんなになれとすすめてくれたが、アッチはいまだにチャンスなし。

「売り急ぎはしないよ」

アッチはお節にハンディをつけられて口惜しかったが、

「あわてる乞食になりたくないものネ」

われながら、うまいことを云ったものだ。

さて、今日はオロモイことあるんだ。

「本当に行く？」

「うん、もうみんな待つてるわ」

お節はアッチを、絵のクロッキーに連れて行くというのだ。そこで裸になってモデルをやる。報酬